第５節　竹林とタケノコ栽培に係る歴史的風致

１　向日市・乙訓（おとくに）の竹の歴史

向日市を含む乙訓地域と竹との関わりは、延喜式（927 年完成）に朝廷へ「箸竹」を貢進する「乙訓園」が、まず史料として古く登場する。日本最古の物語文学「竹取物語」の舞台にも擬せられる。室町時代には「西岡（にしのおか）（乙訓地域に北方の桂付近（京都市西京区）までを含めた中世～近世の広域地名）の竹商人」が日記（「看聞御記（かんもんぎょき）」）や屏風絵（上杉本洛中洛外図屏風）に散見される。

江戸時代の乙訓の村々には竹の年貢が課せられていたことからわかるように、古くから当地には竹林が広がっていた。マダケやハチクの藪は江戸時代から集落を取り囲み、竹材は京建築や竹細工、灘や伏見の酒造用樽のタガ材などに使われた。大正時代頃までは、段丘上に展開する集落の周囲は竹藪で覆われており、竹材としての利用が盛んであった。かつては「竹材を積んだ荷車の列がこの地域の冬の風物詩であった」という話が伝わっている。

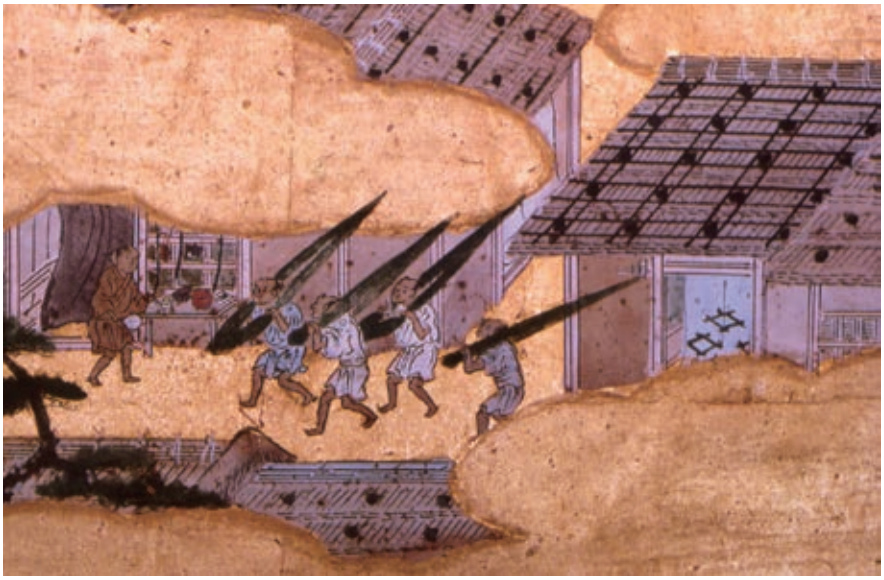

図 2-5-1-1　西岡の竹商人（戦国時代、上杉本洛中洛外図屏風より）
《米沢市上杉博物館所蔵》

しかし、やがて竹材の多くは、昭和 30 年代後半頃になると次第にプラスチックなどの石油系製品にとって代わられるようになる。時を同じくして、市街化の波が押し寄せ、古くからの集落の周囲に多かったマダケやハチクの竹藪は、用途の減少とともに宅地に姿を変えていき、竹材利用は急速に行われなくなっていった。しかし、京都における質の高い伝統的な竹工芸や京建築には、依然として竹材の需要があり、向日市域にもなお京銘竹を扱う専門的業者があり、竹の文化の伝統を体現している。

図 2-5-1-2　集落のまわりを竹林が取り囲む様子（17 世紀中頃、笹井家本洛外図）
《高槻市しろあと歴史館所蔵》

写真 2-5-1-1　角竹 箱をかぶせる様子

写真 2-5-1-2　物集女の竹材店での油抜き作業の様子

2　向日市域における竹林分布の変遷

乙訓の竹林は、単に自然の風景ではなく、竹材を利用するマダケやハチクの藪にしても、タケノコを生産するモウソウチクの竹藪にしても、どちらも大切な経済活動の場である。社会の動きや生活の変化に合わせて、刻々とその姿を変えていく。

需要が増加すれば、成長が早く短期間で竹林を形成できる性質を生かして急速に面積を広げるが、減少すれば利益を生む、別の土地活用方法が考えられるようになる。つまりこの地域の竹林分布のうつりかわりは、それぞれの時代を表す格好の指標ともなる。

①明治 22 年 (1889)

竹林は向日丘陵の段丘上に広く分布している。このころ集落の周囲にはマダケ藪が多く、日当たりの良い丘陵地をタケノコを生産するモウソウ畑に開墾し始めていた。しかしこの時点ではまだ丘陵の裾にとどまり、丘陵頂部の物集女（もずめ）の山にはアカマツ林が広がる。また竹林の中には茶畑が点在するが、この少し前まで乙訓でも茶業が盛んで、モウソウ畑の前は茶畑という場所が少なくない。

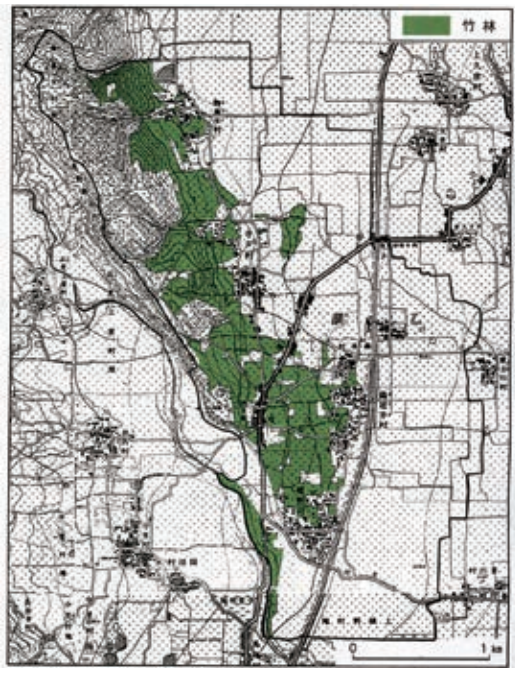

図 2-5-2-3　明治 22 年 (1889) の竹林分布

②明治 42 年 (1909)

向日丘陵上のマツ林は、池の周囲や墓地を残して竹林に変わり、茶畑も姿を消して、全体に竹林面積は増加している。このころまでには鉄道によるタケノコの大量輸送が本格化、販路の拡張もあって、モウソウ畑への開墾が盛んになった。マダケを中心とする竹材利用も、需要が増加。この後、大正期には出荷のピークを迎えた。

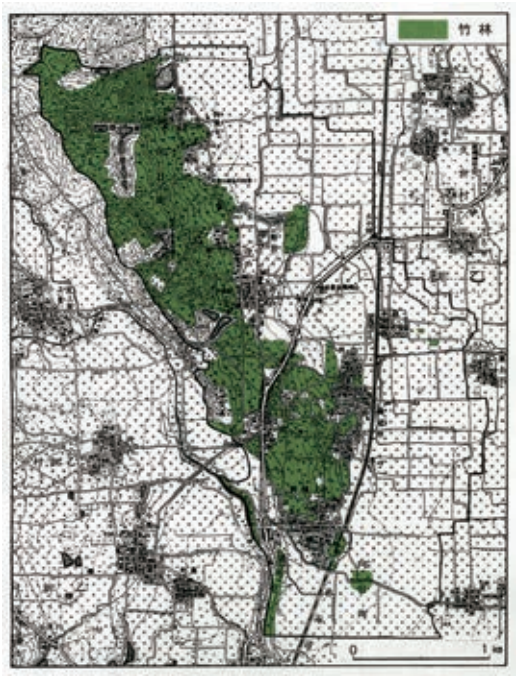

図 2-5-2-4　明治 42 年 (1909) の竹林分布

③ 昭和６年 (1931)

昭和３年 (1928)、新京阪鉄道 (現阪急電鉄) が開通し、京都と大阪を結ぶようになると、乙訓地域にもさまざまな変化がもたらされる。竹林が大きく減少したのは西向日駅の周辺で、宅地造成が始まっている。これ以降、徐々に人口が増加し、集落に近いところのマダケ薮がしだいに姿を消していった。

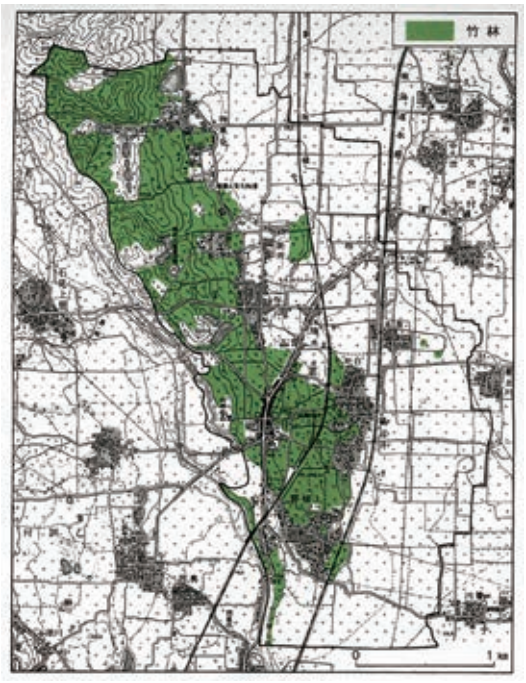

図 2-5-2-5　昭和６年 (1931) の竹林分布

④ 昭和 39 年 (1964)

戦後、市街化は急速に進行、集落周辺の低位段丘上の竹林はほとんど宅地になった。市域の西南部では、寺社や墓地の周囲や小畑川の堤防上にわずかに残るのみで、分布の大部分が向日丘陵上に集中している。マダケ薮の減少には、プラスチック製品の普及により、竹材の用途が減少したことも大きく影響した。

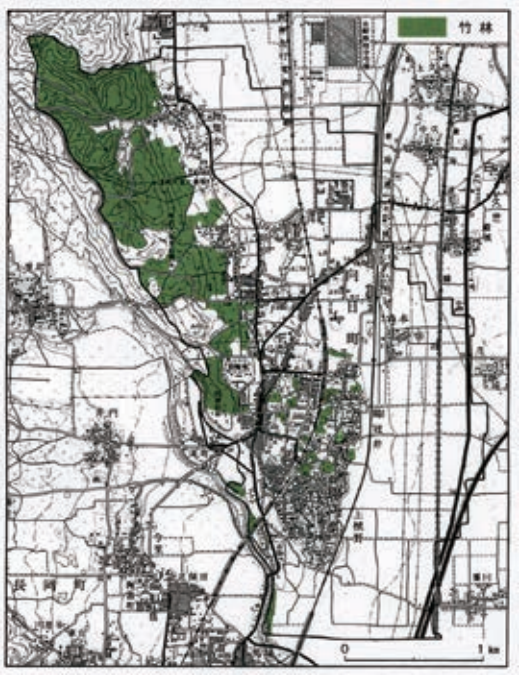

図 2-5-2-6　昭和 39 年 (1964) の竹林分布

⑤ 昭和 58 年 (1983)

数度にわたる宅地化の波の中で、竹林はさらに大規模に失われていった。開発は丘陵上にも及び、寺戸の大牧・芝山や物集女の北ノ口に大きな住宅地が出現、竹林は丘陵頂部にまとまって分布するのみとなっている。

最初の明治 22 年 (1889) の分布と比べてみると、もっとも緑色が少なかった物集女の丘陵部が、現代では緑色が集中的に残っている地域になっていて、竹林の分布がちょうどそっくり入れ替わっていることがわかる。

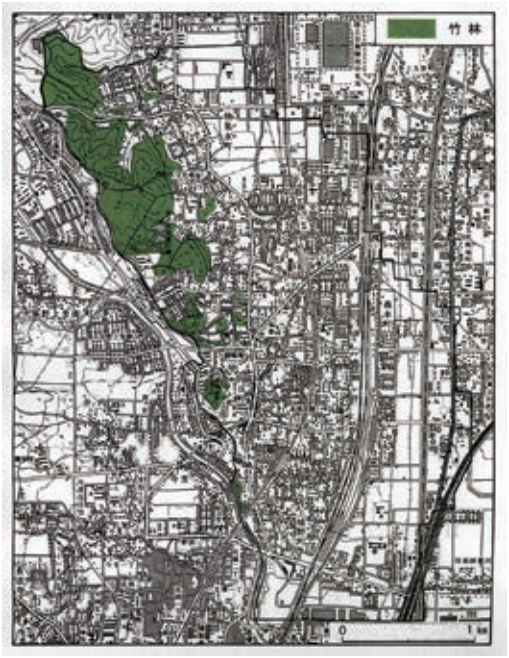

図 2-5-2-7　昭和 58 年 (1983) の竹林分布

このように竹林分布の移り変わりは、それぞれの時代を表わす格好の指標ともなり、向日市域ではその傾向が顕著に現れている。

こうした竹林景観の特徴を考えるならば、経済活動の帰結としては、向日市域の竹林は消滅する可能性がある。実際に、丘陵地でのタケノコ栽培の重労働は、高齢化する栽培農家の現状からすると、維持管理はますます困難な状況である。

しかし、これまでみてきたように、当地の竹林は古くから広く分布し、京都近郊という立地によって、竹材利用もタケノコ栽培も、他の地方には見られない高度に洗練された竹の文化を営んできた。竹に

対する地域住民の思いも深い。竹のある風景は、面積的には減少しているとはいっても、向日市域に残すべき歴史的風致である。

3　竹材利用の消長

明治以降の乙訓における竹林経営については、明治10年代の乙訓地域の各町村では、多量の竹材や「たく」（竹の皮）を産出しており、近世から続く主要物産としての地位を保っている。向日市域の寺戸村や大山崎町域の円明寺村など、丘陵地を含む村の産出量が目立つが、勝竜寺村や樋爪村など川沿いの低地でも産出している（表 2-5-3-1 「明治 10 年代の乙訓郡域の物産」参照）。

「4　タケノコ栽培の歴史」で述べるように、モウソウチクが乙訓に移植されるのは江戸時代も後期になってからと考えられ、それ以前の乙訓地域の竹林風景は、マダケやハチクによって占められていた。集落のまわりを囲む竹林の多くはマダケとみられ、モウソウチク以前には、竹林はむしろ低地に多く分布していたと考えられる。モウソウチクのタケノコ栽培が本格化してからも、低地のマダケ・ハチクを中心とした竹林経営は、ますます盛んとなっていった。

大正 10 年（1921）頃の乙訓郡内の竹林は、マダケがもっとも広く、次いでモウソウチク、クロチクと続く。クロチクは釣り竿に適しており、またこの時期海外へ移出されるさまざまな工芸品に、好んで多く用いられたという（表 2-5-3-2 「大正 10 年（1921）頃の竹種別面積表」参照）。

注意を要するのは、同表にみえるモウソウチクは、タケノコを収穫するための畑ではなく、竹材を産出するモウソウチクの竹林面積である点である。一般に先止めするタケノコ畑の竹は、粘りが少なく竹材の利用に向かない。この地では「ドンボ」と呼ばれ、親竹としての役割が終わり更新・伐竹されても、竹材用として生育した竹材よりは、かなり下値でしか取り引きされない。タケノコを掘るための畑（ホリヤブ）と、竹材を利用するための竹林（タテヤブ）とは、区別されている。同表のモウソウチクは、このタテヤブに相当すると考えられ、竹材利用のモウソウチクもかなりあったことがわかる。

明治以降に鉄道が開通して竹材の移出が容易になり、海苔採取用の竹枝や海外輸出用材として用途も広まり、大正期の乙訓地域における竹林経営は、まさにピークを迎えた。

大正 7 年（1918）には、乙訓郡竹林同業組合が結成され、「乙訓竹」の声価を高めるための検査を実施し、竹材の販路拡張や販売方法の改善に努めることが目的に掲げられた。大正 12 年（1923）からは、乙訓郡役所内に竹林関係の専任技術者が配置され、この頃、郡内の竹林を脅かしていた竹の枯死について、予防法を研究・指導するようになった。

しかし、竹の枯死の蔓延も影響したのか、昭和期に入ると、竹林経営に関する目立った動きはみられなくなっていく。大正期と同様に、昭和 3 年（1925）の御大典にも、乙訓郡内の各町村から御用材として竹材が供納されるが、その後は、昭和 9 年（1931）の室戸台風で竹林が大きな被害を受けたことなどが報じられている。戦後になって、プラスチック製品などが大量生産によって出回るようになると、竹材の用途は徐々に狭められ、これと相前後して乙訓地域の都市化が進み、低地のマダケやハチクの竹林が失われていくこととなる。

○　竹の伐り出し

竹を伐るのは、水分が少なく、虫がつきにくい９月から 11 月が最適である。乙訓地域の農家にとっては、稲刈り前の重要な副業でもあった。タケキリと呼ばれ、親方について、４、５人で竹薮をまわり、根伐り、枝払いなどの役割を分担する。

根伐りは、竹の太さによって、伐り方が異なり、まわりが９寸以上の竹はのこぎりで、６寸以下はなたをななめに１回打ち下ろして伐る。７寸から８寸のものは、なたで、竹の周囲をまわりながら伐る。

枝払いは、タケウチガマを使って行う。皮を剥いで、竹の稈（樹木の幹にあたる部分）を痛めないよう、枝の下方から刃を入れ（イキガマ）、次に上方からカマの背でたたき（カエリ）枝を払う。

写真 2-5-3-1　径７寸から８寸の竹のまわりぎりの様子

写真 2-5-3-2　枝払いの様子

写真 2-5-3-3　タケキリの道具

伐り出した竹材は、束場に運び、結束して積み上げておく。結束の本数は、太さによって異なる。１日にマダケなら 16 束、モウソウチクなら 50 本は仕上げなければ、１人前のタケキリとは言われなかった。

そして、１月から３月の冬の季節を待って、束場から桂川の浜や、鉄道の駅まで運び込む。かつては、竹材を積んだ荷車の列がこの地域の冬の風物詩であった。

写真 2-5-3-4　結束された竹材

表 2-5-3-1　明治 10 年代（1877 ～ 1887）の乙訓郡域の物産

町村名	タケノコ	竹	竹関係	茶	その他	税地 町 反 畝	町村制施行（1889年）後の町村名
向日町	1,000貫			490貫		2. 5	
鶏冠井村		2,000束	箒478貫	160貫	菜種154.2石	75. 8. 8	向日町
森本村			扇骨80,000本	75貫	綿60貫、大豆5石	46. 2. 4	
寺戸村	19,725貫	24,000本		3,824斤	菜種185石、柿189,000個、瓦40,000枚	131. 1. 1	
上植野村					菜種150石、蚕豆75石、小豆2.7石、大豆3.8石	101. 1. 5	
物集女村	2,700貫			45貫		49. 2. 6	
神足村	*2	*2	*2	630斤	菜種油7.5石	112. 5. 8	
調子村		350束			菜種20石、蚕豆5石	20. 1. 6	新神足村
勝竜寺村		520束	箒300貫		菜種28.5石、夜賃2,500枚、綿480斤、牛ほう60貫、大根1,500貫	80. 1. 0	
馬場村					菜種29石、蚕豆13石、大豆13石	30. 9. 2	
開田村	500駄	1,260束		3,200斤	菜種70石	43. 2. 8	
友岡村		200束			畑菜20貫、綿40貫、芋300貫	25. 4. 9	
下海印寺村	7,920貫	230束		250斤		27. 3. 6	
金ヶ原村	5,600貫				薪1,080貫	9. 0. 6	海印寺村
浄土谷村					松茸30貫、楊梅実3石、薪500駄	5. 2. 8	
奥海印寺村	*2	1,200束	*2	100貫	菜種50石、薪柴80,000貫、松茸400貫	30. 9. 9	
長法寺村	200貫	50束		50貫	菜種30石	17. 4. 8	
栗生村	1,110貫	400束		100貫	木柴2,000束	13. 9. 2	乙訓村
井ノ内村	6,000貫	400束		300斤	菜種15石	27. 5. 8	
今里村	4,500貫	3,200束		400貫		108. 1. 4	
大山崎荘	2,500貫			640貫		109. 9. 4	
円明寺村		47,500本		120斤	柿15,000個、桃2,000個	80. 0. 3	大山崎村
下植野村		4,000本		4,870斤		61. 4. 8	
石見上里村	15,000貫	830束			菜種100石	87. 3. 5	
上羽村	2,860貫	380束				23. 6. 7	大原野村
大原野村	12,350貫	1,920束		150貫	菜種35石、薪3,000駄	55. 8. 1	
石作村	1,580貫	480束			松茸150貫、石灰6,500俵	72. 5. 7	
小塩村	1,200貫	120駄			菜種12石、薪1,500駄		
出灰村					菜種1.5石、炭3,000俵、薪2,000束、石灰6,000俵	2. 5. 0	
外畑村					炭2,000俵、薪3,000束	13. 7. 7	
善峰村	5,500貫	600束			菜種10石	27. 1. 2	
塚原村	20,000貫			1,000斤	菜種20石、大根種3石	20. 3. 4	大枝村
長野新田村	8,000貫	900束			甘蔗730貫大根種5石2斗	32. 8. 2	
東土川村					菜種55石、蚕豆10石	25. 9. 7	
築山村					菜種72石、蚕豆13.5石	36. 2. 1	久世村
大藪村					菜種150石	36. 1. 0	
上久世村					菜種120石	66. 9. 0	
久世村					菜種105石、蚕豆9.6石、大豆67.5石	71. 8. 8	
樋爪村		7,100本		3,000斤		34. 6. 4	淀村
鴨川村						35. 5. 6	
志水村						18. 2. 6	羽束師村
古川村		80束			菜種25石	50. 8. 9	
菱川村					菜種82石、蚕豆45石	56. 1. 9	
久我村					菜種300石、蚕豆135石	132. 8. 4	久我村
石倉村					菜種10石、蚕豆7石	14. 1. 0	

＊1　明治10年代（1877～1887）「山城国乙訓郡村（町）誌」（京都府立総合資料館蔵）による。空白の欄は、該当項目の記載がないもの。
＊2　明治8年（1875）「物産取調書」によれば、神足村の一部である古市村ではタケノコ555貫・竹5,400本・竹皮150貫、奥海印寺村ではタケノコ28,000貫・竹皮100貫が記載されており、典拠とした史料には村によって記載基準が異なる点がある。
＊3　各町村の配列は、第2章表1の配列にならい、対比して参照しやすいようにした。
＊4　税地項目は、町村間の産出量を相互比較するために、各町村の総面積のめやすとして採録した。

表 2-5-3-2 大正 10 年 (1921) 頃の竹種別面積表

（単位：反）

竹種 / 町村名	マダケ	モウソウチク	ハチク	ハンチク（班竹）	クロチク	合　計
向日町	1,280.900	37.600	1.000	1.000	13.500	1,334.000
新神足村	760.025	97.000	−	−	5.000	862.025
海印寺村	356.604	50.000	5.000	2.000	20.000	433.604
乙訓村	507.700	57.500	8.600	−	28.200	602.000
大山崎村	602.000	30.000	20.000	−	98.000	750.000
大原野村	654.301	53.716	26.103	1.807	29.520	765.447
大枝村	444.614	750.000	−	−	22.000	1,216.614
久世村	106.703	−	1.000	−	1.500	109.203
久我村	50.000	−	−	−	−	50.000
羽束師村	68.000	−	−	−	−	68.000
淀　村	39.000	−	−	−	−	39.000
乙訓郡	4,869.847	1,075.816	61.703	4.807	217.720	6,229.893

＊1　乙訓郡役所「実業調査書」（小林正治家文書）による。
＊2　原本では部分的に合計の数値が合わないが、各項目値を尊重し、合計値を訂正して表記した。

4　タケノコ栽培の歴史

物集女・寺戸の丘陵上が、向日市ではモウソウチクのタケノコ栽培の中心である。竹林の多かった乙訓地域では、マダケやハチクのタケノコを食用に供することも、おそらくかなり古くから行われていたと想像される。しかし、竹材の貢納や流通を示す史料が古代や中世から現れるのに対して、乙訓における食用タケノコに関する史料は、江戸時代も中期以降になって、ようやく見られるようになってくる。

モウソウチクのタケノコ栽培は幕末から明治にかけて始まった。モウソウチクの伝来は、江戸時代中後期で、これ以前のタケノコと言えば、在来種のマダケ、ハチクのことであった。乙訓地域では、天明から寛政期（18 世紀末）にタケノコを大阪へ出荷している記録があるが、このタケノコがモウソウチクのものであったかどうかは不明である。

大山崎の「観音寺日譜」の記述によると、安政年間（1854 ～ 1860）には、藪肥に油粕（あぶらかす）や糠糟（にしんかす）を施し、土入れも行われている。これは、現在の手入れとほぼ同じで、幕末頃からモウソウタケノコが栽培の中心となり、増産されていったと考えられる。

明治中後期から生産が本格化し、今日に至るまで乙訓特産の高級食材として全国にその名を知られている。

タケノコは日持ちが極端に悪く、長時間の輸送に耐えられない。京料理の京都、食いだおれの大阪という大消費地に隣接する乙訓地域のタケノコは、地の利を生かし、特に、向日丘陵のような酸性の赤土の土壌が、タケノコ栽培に適しているといわれている。

タケノコは北海道を除く各地で採取されるが、当地のタケノコは、京都式軟化栽培と呼ばれる極めて多くの手間と時間をかける栽培法で生産され、大きくて柔らかいのが特徴である。

収穫が終わったばかりの初夏から施肥・シン止め（枝先を折る）・除草・給水をし、冬季に土入れ・ワラ敷きをして、収穫には「ホリ」という独特のクワで、まだ地中にあるタケノコを掘り上げる。こ

のように、栽培にも工夫を凝らしており、物集女のタケノコは、「白子（しろこ）」と呼ばれる最高級品として、京野菜の専門店や高級料亭へと特別なルートで取引され、「ほんまもん」の美味しさと評判をとって、特産品としての地位を確実にしている。

写真 2-5-4-1　開墾植付けの様子
《「孟宗畑小作慣行に関する調査」京都府立京都学・歴彩館所蔵》

写真 2-5-4-2　開墾後のタケノコ畑の様子
《「孟宗畑小作慣行に関する調査」京都府立京都学・歴彩館所蔵》

写真 2-5-4-3　開墾時　肥料運搬の様子
《「孟宗畑小作慣行に関する調査」京都府立京都学・歴彩館所蔵》

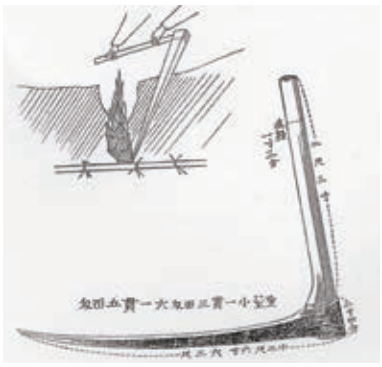

図 2-5-4-1 「筍掘取ノ図」「筍掘取鍬」
《「京都府園芸要鑑」京都府立京都学・歴彩館所蔵》

表 2-5-4-1　乙訓郡のモウソウチクのタケノコ収穫高

（単位：貫）

町村名	明治元年（1868）	明治35年（1902）	明治41年（1908）	＊1大正10年(1921)頃	〔面積〕町反畝	昭和4年（1929）頃
向日町	23,425	57,000	165,510	220,290	73. 4. 3	67,500
新神足村	1,000	62,450	83,562	183,600	61. 2. 0	65,000
海印寺村	13,520	147,700	123,200	312,120	104. 0. 4	85,000
乙訓村	11,800	52,000	127,080	238,680	79. 5. 6	105,000
大山崎村	2,500	86,400	26,500	110,160	36. 7. 2	64,000
大原野村	32,920	199,800	183,600	459,000	153. 0. 0	268,995
大枝村	33,500	87,100	165,330	312,450	104. 1. 5	276,800
乙訓郡	118,665	692,450	874,782	1,836,300	612. 1. 0	932,295

＊1　大正10年頃のみは乙訓郡役所「実業調査書」、他は京都府内務部「孟宗畑小作慣行に関する調査」(1932年)による。
＊2　「長岡京市史」本文編２（1997年）表103に加筆して作成した。

５　向日丘陵でのタケノコ栽培

（１）モウソウ畑の構造と１年間の手入れ

西山山地の東斜面や向日丘陵は、酸性の粘土質で水はけが良く、日当たりにも恵まれてタケノコの生育に適している。草ひき、古竹の更新、肥料やり、土入れなど、まるで野菜を作る畑のように１年を通じて手入れをすることから、乙訓地域では、タケノコを作る竹藪のことをモウソウ畑と呼ぶ。

向日市域のモウソウ畑は、市域北西部の向日丘陵上に展開する。多くは丘陵に近い物集女・寺戸両地区の農家が経営するが、森本・鶏冠井（かいで）・上植野など他地区の農家が所有し経営する場合もみられる。タケノコ栽培を、水田稲作や畑での蔬菜栽培と組み合わせて行う農家がほとんどであり、市域の平均的な農家１軒あたりのモウソウ畑の経営面積は約 25a ほどである。

起伏に富んだ丘陵地に展開するモウソウ畑は、所有する区画を明示するため、あるいは土入れの土が流れ出さないように、ところどころに竹材を横に積んで竹垣が施されている。また境界や内部に溝が通り排水機能を果たしている。

写真 2-5-5-1　畑の中の竹垣

写真 2-5-5-2　畑の中の竹垣と溝

写真 2-5-5-3 畑の中の竹垣と溝（部分アップ）

竹垣は、藪の手入れに向かう農家の軽トラックが通る道路沿いにも設けられている。道路からモウソウ畑への入口には、車が入るようにやや広い空間地が設けられている。収穫時にはここが荷造り作業場にもなるため、覆いが架けられる枠がしつらえてあったり、広いところでは作業小屋が設けられていたりする。

写真 2-5-5-4 旧丹波道と両側のモウソウ畑

写真 2-5-5-5 道路からモウソウ畑への入口

写真 2-5-5-6 モウソウ畑への入口と作業小屋

タケノコづくりの１年は、まず、親竹の選定から始まる。タケノコの生産性を保つために、４月中旬に出たタケノコから１反（10a）に 30 本ほど選んで、新しい親竹に仕立てる。

親竹として残されたタケノコの脇には、間違って掘り上げられたり倒されたりしないよう、目印として割竹が差し込まれる。

やがて竹に生長すると、竹の桿に墨で「丑」や「寅」など、生えた年の干支を書き入れ、更新の覚えとする。栽培に慣れた農家は、干支を書かなくても竹桿の肌をみれば、何年物の竹かわかるという。

写真 2-5-5-7　親竹の選定

写真 2-5-5-8　生えた年（寅）の記録

写真 2-5-5-9　まばらに親竹が立つモウソウ畑

写真 2-5-5-10　手入れされていないモウソウ畑

写真 2-5-5-11
シン止め作業の様子

写真 2-5-5-12
シン止めされた竹

写真 2-5-5-13　シン止めされて先が丸くなっている竹薮

夏から秋にかけては、「ヤブの掃除」として、草引きや「サバエ」と呼ばれる生えてくる細い竹を刈ったり、肥料（化学肥料）をやったりする。近年は夏に雨が降らず渇水になることが多く、軽トラックの荷台いっぱいの大きさのポリタンクで水を運ぶ重労働も加わる。

親竹に残す以外の更新する竹を伐採するのは９月から 11 月頃で、この時期に伐るのはもっとも水分が少なく堅く良質な竹材として使えるからである。竹は、１月以降になると水分を吸い上げはじめ、夏過ぎまでの間に伐ると、竹材の水分が多すぎて腐りやすくなる。伐採したモウソウチクは、現在では用途は限られるが、モウソウ畑の中の竹垣や、溝を渡る小橋など、竹林の中の畑づくりには、いたるところで用いられている。

写真 2-5-5-14　親竹以外の竹を伐採

写真 2-5-5-15　集められるのを待つ伐採された竹

写真 2-5-5-16　竹薮の中の溝を渡る小橋

写真 2-5-5-17　ワラ敷きの様子

写真 2-5-5-18　土取り場所の土を削る

写真 2-5-5-19　土取り場所の断面

写真 2-5-5-20　土入れ作業①

写真 2-5-5-21　土入れ作業②

写真 2-5-5-22　ワラを敷いた上に土を拡げていく

（2）タケノコの収穫と出荷

タケノコの収穫は、３月下旬から本格化し、４月中旬から５月上旬に最盛期を迎える。

３月頃からタケノコが地面から顔を出し始め、タケノコ掘りの作業が始まる。親竹のまわりの地割れを見てタケノコの位置を確かめ、「ホリ」と呼ばれる道具の刃先を地面に差し込み、テコのように使って、掘り上げる。ホリは、タケノコ産地によって形状に特徴がある。乙訓のホリは少ない力で掘り上げられる工夫がされ、もっとも進化したタケノコ掘り具、と評される。写真左の古い時代のホリは、「ヒツ」と呼ばれる刃部に柄を差し込む部分が大きく分厚くて重い。右の最近のホリはヒツが丸みを帯びて、製作技術の進歩により軽くて扱いやすくなっている。

掘り上げたタケノコを拾い集めるのには、手カゴと呼ばれる、モウソウチクの竹材で幅広に編んだ竹カゴが用いられる。

写真 2-5-5-23　古い時代のホリ

写真 2-5-5-24　最近のホリ

写真 2-5-5-25　タケノコの場所を示す地割れ

写真 2-5-5-26
「ホリ」でタケノコを掘る様子①

写真 2-5-5-27 「ホリ」でタケノコを掘る様子②

集めたタケノコは、サイズや姿形で分けられ、決められた本数と重量で箱詰め作業を行い、市場に出荷される。かつては、「ダンベ」と呼ばれるモウソウチク製のカゴに入れて出荷していたが、現在は段ボール箱に箱詰めしている。

おいしいタケノコは、鮮度が大切であるため、タケノコ畑から掘りあげて、できるだけ早く消費者に届けることが求められる。

タケノコの収穫は、大きく「朝掘り」と「宵掘り」に分けられる。

朝掘りは早朝に収穫作業を行い、例えば物集女の場合は、午前 9 時 30 分までに地区の集荷場へ持って行く。「京果（京都青果合同株式会社）」のトラックが集荷に来て、京都市中央卸売市場へ運び、近郷野菜部のその日の一番最後のセリにかけられ、午前中には仲買商の手にわたる。早朝の収穫は苦労も多いが、新鮮で珍重され、より高値で取引される。

宵掘りの集荷時間は午後 4 時 30 分であり、各農家は朝掘りが終わって休憩した後、タケノコが多く出る時期には再び収穫作業を行い、夕方の時間に間に合うように集荷場へ持って行く。京果のトラックは中央市場へ運び、一晩置いて、翌朝の近郷野菜部の一番初めのセリにかかる。掘った翌朝に仲買商の手にわたりその分鮮度は落ち、値段も下がる。宵掘りは、大阪の「大果（大阪青果会社）」からも集荷があり、茨木市にある大阪府中央卸売市場のセリにかけられる。

「クマ（色が黒くなってしまったもの）」や「チュウボリ（キズモノ）」のタケノコは缶詰用にまわり、森本にあるタケノコ缶詰工場から引き取りに来る。

タケノコは、丘陵上の畑（竹藪）の立地する場所のわずかな違いによって土質が異なり、味も変わってくる。特に良質のタケノコを産出する農家は、共同出荷場に持って行かず、京都の高級料亭や京野菜専門の八百屋と特別に契約を結び、直取引している。

最近では、活性炭をつめて出荷する方法が取られ、宵掘りでも朝掘りと同様の鮮度が維持できるよう、工夫されている。

写真 2-5-5-28
掘り上げたタケノコを集める

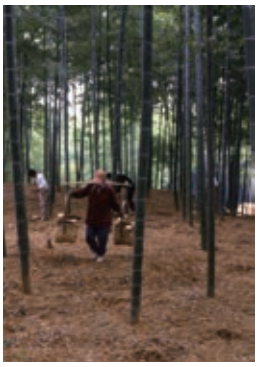

写真 2-5-5-29
手カゴと天秤棒で運ぶ

写真 2-5-5-30
収穫に使う手カゴ

写真 2-5-5-31　箱詰めの様子

写真 2-5-5-32　トラックに積んで搬出

写真 2-5-5-33　物集女の集荷場

写真 2-5-5-34　各農家から運び込まれる

現在のタケノコ栽培で昭和 30 年 (1955) 頃と比べて変わった点は、肥料が人糞から化学肥料になったこと、ワラ敷きの時期が早くなり、伐らずに長いままで敷くこと、出荷に活性炭を使い、長持ちさせることなどである。このほか、土入れに掘削機を使うようになったが、起伏の多いモウソウ畑では、重労働であることに変わりがない。

タケノコ栽培の中で、もっとも労働力を要する土入れ作業は、冬季に行われるため、他の農作業と重ならない。ただし、タケノコ掘りの時期は、一時、ナスの手入れと重なり、この時期が農家にとって、もっとも忙しくなる。

表 2-5-5-1　タケノコの栽培暦

▲ 一年の農家の仕事（向日市物集女町）　現在の筍栽培を1955年頃と比べて変わった点は、肥料が人糞から化学肥料になったこと、わら敷きの時期が早くなり切らずに長いままでひくこと、出荷に活性炭を使い長持ちさせることなどです。このほか土入れに掘削機などを使うようになりましたが、起伏の多い孟宗畑ではやはり重労働であることに変わりありません。
筍栽培のなかで、もっとも労働力を要する土入れ作業は、冬期に行なわれるため、他の農作業とは重なりません。ただし筍掘りの時期は、一時なすびの手入れと重なり、この時期が農家にとってもっとも忙しくなります。

6　モウソウ畑と古墳

（1）　乙訓古墳群

モウソウチクのタケノコ畑が広がる向日丘陵には、古墳時代に築かれた 100 m級の首長墓が尾根上に並んでいる。向日神社が所在する丘陵南端部から元稲荷古墳、五塚原古墳、寺戸大塚古墳が、丘陵から東に降りた段丘上に南条古墳が、段丘裾部に物集女車塚古墳が所在する。

これら５基の古墳に、桂川右岸の近隣市町に所在する８基を加えた 13 基の古墳は、古墳時代初頭から終末期（３世紀～７世紀）までに、限られた地域で継続的に築造された首長墓であり、この造営過程は畿内中枢部（大和政権）の大王陵の動向と軌を一にしていることから、貴重な遺構として、平成 28 年（2016）３月１日に「乙訓古墳群」として一団で史跡に指定された。（当初 11 基が指定され、後に２基が追加）

図 2-5-6-1　向日丘陵のおもな古墳（分布）

写真 2-5-6-1　妙見山古墳の発掘現場

写真 2-5-6-2　妙見山古墳の発掘現場

写真 2-5-6-3　京都大学考古学研究室による
寺戸大塚古墳発掘現場風景

（2）　モウソウチクへの開墾と古墳の発掘

明治時代の中期以降、それまでアカマツが多い里山であった向日丘陵の日当たりの良い斜面を、タケノコの畑にするため、開墾してモウソウチクを移植することが盛んになった。丘陵の裾の方から竹林を広げ、丘陵頂部に開墾が及んだのが大正時代である。頂部の尾根上には 100 m級の古墳が並んでいた。

当時はちょうど全国的に組織的な文化財調査が開始した時期で、京都府内では大正６年（1917）史蹟勝地調査会が組織されたばかりであった。タケノコの手入れのため、冬季に土入れ作業などが行われるたびに石室や須恵器が露出すると、調査会委員の旧京都帝大の先生方が来て学術調査に発展した。調査会の初期の報告書には、向日丘陵の前期古墳が多く掲載され、全国的にその名が知られるきっかけとなった。

土入れ作業の時に古墳関連の遺物や石室の石材などが発見されることは、現代でもなおあり、タケノコ栽培農家の中には、古墳について関心が高く、造詣の深い方もおられる。

タケノコの生産は、向日丘陵に数多く所在する古墳と密接な関係がある。

7　まとめ

高度成長期に進んだ宅地開発によって、昔からの集落まわりの低地にあったマダケやハチクの竹藪はほとんど失われ、向日市の竹林の多くはモウソウチクである。タケノコ生産の場として日当たりを良くするため密植を避け、親竹も周期的に更新し、タケノコ畑の竹林はいつも清々しく管理されている。地面を柔らかくするための土入れは、丘陵の赤っぽい粘土層を削って薄く拡げる重労働で、保温のため上にワラを敷く。

全国的にも貴重な古墳群が展開する向日丘陵の起伏に富んだ斜面を覆う緑の竹林と、ワラの間にのぞく赤土のコントラストは、美味しいタケノコづくりに取り組む農家の努力の結晶ともいえる見事な風景であり、向日市を代表する歴史的風致である。

写真 2-5-7-1 向日丘陵上のタケノコ畑とタケノコ掘り

コラム　竹の径

竹林をぬうようにのびている道に、モウソウチクを使って竹垣を配し、散策道を整備している。竹垣は「古墳垣」「かぐや垣」「物集女(もずめ)垣」「寺戸垣」など、歴史と文化をモチーフに考案された８種類のオリジナルデザインで、延長 1.8 ㎞に及ぶ。材料は地元産竹材で、整備には向日市竹産業振興協議会が携わっている。平成 13 年度 (2001) に国土交通省「手づくり郷土(ふるさと)賞」、平成 14 年度 (2002) に読売新聞社「全国遊歩 100 選」、平成 16 年度 (2004) に日本ウオーキング協会「美しい日本の歩きたくなるみち 500 選」に選ばれ、京都府選定文化的景観(平成 22 年度 (2010))となっている。

写真 2-5-7-2　竹の径の古墳垣

写真 2-5-7-3　竹の径